

トマス・アキナス『「主の祈り」講解』 — 翻訳のこころみ③ —

Thomas Aquinas' 'In Orationem Dominicam' — Trial Translation III —

山口隆介

Yamaguchi Ryusuke

要 旨

本試訳は『「主の祈り」講解』の終盤3分の1を訳出するものである。内容は、「私たちから、私たちの負い目を取り去りたまえ私たちも私たちに負い目ある者を赦すように」という第5の願い、「また私たちを試みに引き入れてくださいませんように」という第6の願い、「さりながら、私たちを悪から解放したまえ。アーメン」という第7の願いの講解である。

底本としては、In Oratio Dominicam videlicet “Pater Noster,, Expositio, in: S. Thomae Aquinatis Doctoris Angeli Opuscula Theologica, vol.II., De Re Spirituali, cura et studio P. Fr. Raymundi M. Spiazzi O. P., Marietti, 1954, pp.230-235を用いた。マリエッティ版の神学小品集第2巻は、収録する全著作の節に通し番号を振っており、翻訳中の節番号は1080番から1109番である。

なお、文中に多数存在する聖書からの引用に関し、書名の和訳は新共同訳に拠ったが、『詩編』の編番号は文中ではヴルガタ訳の番号で示されているので、〔 〕内に新共同訳での編番号を記載した。

本訳は訳者の知るかぎり本邦初訳である。

Key Words : トマス・アキナス, 祈り, 主の祈り

願い5

私たちから、私たちの負い目を取り去りたまえ

私たちも私たちに負い目ある者を赦すように

1080 知恵や勇気に長けている人たちがいる。そして、自分の徳に自信があるため、することを知恵がある仕方ではなせず、完璧が意図されていることをダメにしてしまうのが、目にされる。「思考は助言によって強められる」(『箴言』20章18節)。しかし、注目すべきは、聖霊は勇気を与える者であり、さらには助言をも与えるものだということである。すなわち、人間の救いに関するすべての善き助言は、聖霊に由来する。助言が人間に必要なのは、苦難の最中である。例えば、弱っている時の医者たちの助言のように。それゆえ、人間もまた、罪によって霊的に弱っている時は、健康になるための助言を求めなければならない。

ところで、罪人に必要な助言は、「私の助言があなたを喜ばせますように、王よ。あなたの罪を施しによってあがなってください」と言われる聖書の箇所を示されている(『ダニエル書』4

章24節)。それゆえ、罪に対抗する最善の助言とは、施しと憐みである。そしてそれゆえ、聖霊は罪人に、「私たちの負い目を私たちから取り去ってください」と願い祈るよう教えているのである。

1081 また、私たちは神に対し、彼〔神〕の権利によって私たちが得たものについて負い目を負う。そして、神の権利とは、私たちが彼〔神〕の意志をなすこと、私たちの意志より彼〔神〕の意志を優先してそうすることである。それゆえ、私たちが私たちの意志を彼〔神〕の意志より優先する時、私たちは神から彼〔神〕の権利を奪うことになる。そして、これは罪である。それゆえに、罪とは私たちの負い目である。それゆえに、聖霊の助言とは、私たちが、神に罪の許しを願うことであり、そしてそれゆえに私たちはこう言うのである。「私たちの負い目を取り去ってください」。

1082 ところで、この言葉について3つのことが考えられる。1つ目は、どのようにしてこの願いは生じるのか、2つ目は、いつ満たされるのか、3つ目は、我々の側では、〔この願いが〕満たされるのに何が必要とされるか、である。

A) 1つ目のことについては、この願いから、この生で人間に必要な2つのことを結びつけることができるということを知っておかなければならない。

そのうちの1つは、人間は常に恐れと謙遜のうちにあるべきだということである。すなわち、あつかましい人々がいて、人間はこの世で、自ら罪を避けて生きていくことができるというほどだったが、このようなことを与えられたのは、計り知れない霊を有していたキリストと、「彼女〔すなわちかの乙女〕については、罪について論じる時、私は一切言及しようと思わない」とアウグスティヌスが言うように、恵みに満ちており、そのうちには一切の罪がなかった至福なるかの乙女〔聖母〕だけである。しかしながら、他の聖人たちの誰にも、少なくとも赦される罪〔小罪〕すら起きないということは認められなかった。「もし、私たちが、我々には罪などないのだからと言うとしたら、私たち自らを正道から踏み外させるものであり、私たちのうちに真理はないことになる」(『ヨハネの手紙 一』1章8節)。

そして、このことは、この祈りで証された。すなわち、すべての聖なる人々にとっては、こう言うことが、一致して相応しい。「私たちの父よ」、このことのうちでこう言われる。「私たちから私たちの負い目を取り去ってください」。こうすることで、すべての人は、自らが罪人であり、負い目を負う者であることを認識しなおし、告白する。そして、あなたが罪人であるなら、あなたは恐れ、謙遜でなければならない。

1083 もう1つのことは、常に希望のうちに生きるべきことである。たとえ私たちが罪人であっても、私たちは絶望してはならず、けっして絶望が私たちをより大きな、よりさまざまな罪へと引き込むことがあってはならないからである。使徒が言っているように。「絶望するものは、自分自身を、不貞に、すべての清らかならざる行ないにゆだねたのである」(『エフェソの信徒への手紙』4章19節)。それゆえに、私たちが常に希望しているということは、大いに有用である。人間が罪人である時にはいつも、もし完全に〔悔恨の心で〕打ち砕かれ、回心したのなら、神が彼から〔罪を〕取り去ってくださるよう希望しなければならないからである。そして、この希望が私たちの

うちで強められるのは、「私たちから私たちの負い目を取り去ってください」と祈るときである。

1084 しかし、ノヴァティアヌス派の人々は、この希望を捨て去ってしまった。彼らはこう言ったのである。洗礼の後ひとたび罪を犯した者は、決して憐みを得なかったと。そして、これは、真ではない。キリストがこう言ったのが真実である限り。「私はあなたからすべての負い目を取り去った。あなたが、私に懇願したからである」(『マタイによる福音』18章32節)。それゆえ、あなたが願う日はいつでも、あなたは憐みを得ることができる。罪を悔いて懇願するなら。したがって、この願いから、恐れと希望とが共に起きるなら、すべての罪人は、打ち砕かれて告白する者であるから、憐みを達成することになる。そしてそれゆえ、この願いは必要だった。

1085 B) 2番目のこのことに関しては、罪のうちには2つのこと、すなわち、それによって神が怒りを覚える過ちと、過ちのために負わねばならない罰。しかし、過ちは、悔恨のうちで赦される。それ〔悔恨〕は告白すべきことだ、償うべきだとの企図を伴うから。「私はこう言った。私は、私に反して、私の不正を主に告白しよう。すると、あなたは、私の罪という不敬虔を赦された」。だから、絶望してはならない。そうでなければ〔絶望しなければ〕、過ちを赦されるには、告白すべきとの企図を伴う悔恨で十分だからである。

1086 しかし、ひょっとしたら、誰かがこう言うかもしれない。悔恨で罪が取り去られるのなら、なんのために司祭は必要なのか。

このことについてはこう言わなければならない。神は、悔恨のうちに過ちを取り去り、永遠の罰は一時的なそれ〔罰〕に取り替えられる。しかし、それでもやはり、一時的な罰を受けるような義務付けられたままではある。それゆえ、告白なしに死んでしまったら、しかし、告白をあなたどったわけではなく、優先はしていたなら、煉獄に行くことになり、そこでの罰は、アウグスティヌスが言うように、最大になるだろう。それゆえ、あなたが告白する時、司祭はあなたをこの罰から、鍵としての力によって解き放つ。彼〔司祭〕にあなたは、告白する時身を投げ出すべきである。そしてそれゆえ、キリストは使徒たちにこう言ったのだ。「聖霊を受けなさい。あなたたちが罪を赦した人々は赦される。そして、あなたたちがそのままにしておく人々のものはそのままである」(『ヨハネによる福音』22章22-23節)。それゆえ、一度誰かが告白する時、彼からはこのような罰に関わる何かが取り去られる。また、再び告白する時も同じである。告白するのと同じだけ、自分からすべて〔罰〕が取り去れるということが可能である。

1087 そして、使徒の後継者たちは、他のやり方での、この罰の赦しを発見してきた。すなわち、〔神の〕愛のうちにある者に対して、〔直に〕声で伝えられるのに応じて、また公けに発布されるのに応じて効力を発揮する贖宥の恩恵である。そしてパパ〔教皇〕にはこれができるということは、十分明らかである。すなわち、多くの聖人は多くの善をなしてきたが、この人々は、罪を犯してこなかった。少なくとも死に値する罪〔死罪、大罪〕は、これらの善を彼ら〔聖人たち〕は、教会が使うためになしてきた。同じく、キリストと至福なる乙女〔聖母〕との功德も、宝庫にあるかのごとくである。それゆえ、最高の神官〔教皇〕は、そして、彼が委任した人々は、このような功德を、必要な場合、分配することができる。

それゆえ、罪が取り去られるというのは、悔恨によって過ちが取り除かれるだけでなく、告白と贖宥によって罰が取り除かれるということでもある。

1088 C) 3つ目のことに関しては、次のことを分かっていなければならない。私たちの側で必要なのは、私たちが私たちの隣人から、私たちに対してなした不正を取り除くことである。それゆえに、「私たちも私たちに負い目ある者を赦すように」と言われているのである。すなわち、もしそうでなかったら、神は私たちを赦さないだろう、と。「人間は人間に対して怒りを保つ。そして、神に対して癒しを求める」(シラ書〔集会の書〕28章3節)。「赦せ、そして赦してもらえ」(『ルカによる福音』6章37節)。そして、それゆえ、その願いのうちでのみ、〔順序を〕反対にしてこう言われているのである。「私たちも私たちに負い目ある者を赦すように」。したがってこれは、あなたがもし〔負い目を〕取り去らないなら、あなたから〔負い目は〕取り去られない、ということである。

1089 しかし、あなたはこう言うかもしれない。私は、先行する言葉、すなわち「私たちから取り去ってください」を言い、そして「私たちも私たちに負い目ある者を赦すように」は黙ってしようと。

それではあなたは、キリストをごまかさうと言うのか。しかし、ごまかさない〔ごまかせない〕ことは確実である。すなわち、この祈りを作ったキリストは、それについてよく憶えておられる。それゆえに、ごまかされ得ない。したがって、口で言うなら、心でもそうすべきである。

1090 しかし、その隣人から〔負い目を〕取り去ろうとしていない人が、「私たちも私たちに負い目ある者を赦すように」と言わなければならないのかが問われる。そんなことはないように思われる。というのは、嘘をつくことになるからである。

こう言わなければならない。嘘をつくことにはならない。というのは、〔祈りというのは〕自分の人格において祈るのではなく、教会のペルソナにおいて祈るのであり、これ〔教会のペルソナ〕はごまかされないからである。そして、それゆえ、この願いは多くの人のおかれる〔ある〕ことになる。

1091 しかし、次のことも分かっておかねばならない。2通りの仕方です〔負い目は〕取り去られるのである。1つ目の仕方は、完全な人々のやり方で、すなわち不正を受けた者が不正を与える者〔が生きて存在すること〕を必要とする〔求める〕ことである。「平和を求めよ」(『詩編』33〔34〕編15節)。もう1つの仕方は、すべての人に共通のやり方、これへとすべての人はつかまえられているやり方で、すなわち、願う者に赦しを与えるということである。「あなたを傷つける隣人に対しては残しておけ。あなたに願う時に罪は解かれる」(『シラ書〔集会の書〕』28章2節)。

このことにはさらなる至福が伴う。「憐み深い者は幸い」。すなわち、憐みが私たちに私たちの隣人を憐れませてくださる。

願い6

また私たちが試みに引き入れてくださいませんように

1092 たとえ罪を犯しても、それでも罪からの赦しを得ようと欲する人たちがいる。そこで、彼らは告白もし、悔い改めもする。しかし、それでも、罪へと再び突撃しないことに、しかるべきすべての努力を向けない。これは適切ではない。すなわち、一面では、罪を嘆く、つまり悔い改めているとともに、もう一方の面では嘆きながら〔嘆きを?〕積み上げている、つまり罪を犯している。そしてこのことについてはこう言われている。「洗われよ。清くあれ。あなたがたの考えの悪を私の目から取り除けよ。倒錯した行いをやめよ」(『イザヤ書』1章16節)。そしてそれゆえ、既に言われたように、キリストは、順序としてはこれより先に、私たちに、罪の赦しを願うことを教えられた。これ〔願い6〕では私たちに、罪を避けられるよう願うことを教えられる。すなわち、私たちが試みに引き入れられ、罪を犯すことのないように。そしてこう言われた。「また私たちが試みに引き入れてくださいませんように」。

1093 このことについては3つのことが問われる。1つ目は、試みとは何か。2つ目は人間はどのようにして試みを受けるか、そしてそこから出てくることだが、3つ目には、それでも試みに合った場合、どのように解放されるか。

A) 1つ目のことについては次のことが分かっている。試みとは、試すこと、すなわち〔何かを〕証明することに他ならない。それゆえに、人間を試みるとは、その徳性を証明することである。

そして、人間の徳性は2つの仕方で試される。したがって、人間の徳性は2つのことを成し遂げる。そのうちの1つは、善く行為されるべきものに関わる。すなわち、善なる行為をするということに関わる。もう1つは、悪を用心することである。「悪から逸れよ、善をなせ」(『詩編』33〔34〕編15節)。したがって、人間の徳性は、時には善くならずことで、その限りで証明され、一方、時には悪をやめることで、その限りで証明される。

第1のこと〔に関する限りで、すなわち、善をなす〕限りで、人間は善への準備ができている、すなわち断食やそのようなものとしての善への準備が出来ているとはっきりするかどうか証明される。あなたの徳が大きいのは、あなたが善への準備が出来ていることがはっきりする時である。そして、このやり方では、神が人間について証明する時がある。人間の徳性が彼の目に触れないことはない。これは、すべての人がそれ〔徳〕を知り、すべての人に手本として与えられるためである。このようにして、神はアブラハムを試みた(『創世記』22章)。またヨブも試みた。そしてそれゆえ、神はしばしば、義人に試練を送るが、忍耐強く服することで、彼らの徳が明らかになるようにし、そして、徳を増進させるためである。「あなたたちを試みているのは、あなたたちの神、主だ。それは、あなたたちが彼を愛しているか否かを、明らかにするためである」。以上のようにして、神は善へと呼び出すことで〔人間を〕試みる。

1094 第2のこと〔に関する限りで、すなわち、悪をやめる〕限りで、人間の徳性が証明され

るといふのは、悪に引き入れることによつてのことである。そして、もし善なる仕方で抵抗し、また同意しなければ、この時、人間の徳は大きい。しかし、人間が試みに屈するなら、この時、人間には徳はない。また、このようなやり方では、何者も神に試みられることはない。すなわち、「神は悪へと誘惑しないものである。そして、彼は何者も試みない」と言われているように（『ヤコブの手紙』1章13節）。しかし、人間は自分自身の肉によつて、悪魔によつて、また世によつて〔悪に引き入れられることにより〕試みられる。

1095 a) 肉による〔試み〕というのには、2通りある。1つ目は、肉が悪へと刺激し、駆り立てることによつてというものである。すなわち、肉は常にその快樂を求め、すなわち、肉的な快樂を。そのうちにはしばしば罪がある。肉の快樂にこだわり、かかざらわっている人は、靈的なものを無視する。「しかし、あらゆる人が、その情欲によつて試みを受ける」（『ヤコブの手紙』1章14節）。2つ目は、肉が善から引き戻すということによつて試みることである。すなわち、靈は、それ自体として、常に靈的な善に楽しみを覚えるが、肉は圧迫するものとして、靈を妨げる。「滅びる体は、靈を圧迫する」（『知恵の書』9章15節）。「私は、内的人間に従つて神の法を共に喜ぶ。しかし、私の手足には、私の心の法に逆らう別の法があるのを見る」（『ローマの信徒への手紙』7章22節）。

しかし、この試み、すなわち肉の試みは、非常に重い。といふのは、私たちの敵、すなわち肉は、私たちに結びついている。そして、ボエティウスが言っているように、災厄が害をなすのに、親しい敵ほど効果的なものはない。そしてそれゆゑ、目覚めてこれ〔肉〕に対さなければならない。「目覚めて、祈れ。あなたたちが試みに入り込まないように」（『マタイによる福音』26章41節）。

1096 b) 悪魔は、最も強力に試みてくる。すなわち、肉が価値なきものとして退けられた後には、別のものが蜂起するのであり、それが悪魔である。彼に対して私たちにあるのは大いなる格闘である。使徒によれば、「私たちは、肉と血に対して格闘できない。しかし、〔世の〕君主と権勢とに対しては、つまり世の支配者、この闇の支配者に対しては格闘する」（『エフェソの信徒への手紙』6章12節）。それゆゑ、試みる者は、明確にこう語られもする。「試みる者が、あなたたちを試みるかどうかありませんように」（『テサロニケの信徒への手紙 一』3章5節）。

そして、彼〔悪魔〕の試みは、もっとも巧みに進行する。すなわち、彼〔悪魔〕は、熟練した善なる将軍が、城砦を取り囲んでいる際、彼が攻撃しようとしている者の弱点をよく考えるのと同じく、彼〔悪魔〕の場合は、人間は〔悪魔よりも〕無力であるので、彼〔人間〕を試みる。そしてそれゆゑ、〔悪魔は〕人間が、肉を価値なきものとして退けてなお陥りがちである悪徳、すなわち、怒り、傲慢、またその他靈的な悪徳について、試みる。「あなたたちの敵対者たる悪魔は、言わば吼え猛る獅子、むさぼる者を求めて歩き回っている」（『ペトロの手紙 一』5章8節）。

1097 ところで誘惑する時、悪魔は2つのことをする。誘惑する人間にいつも何らかの明白な悪を示すわけではなく、善の見かけを持つ何かを示し、とにかく最初にそうすることで、彼〔人間〕をその原初の企図からほんの少し引き離そうとすることがある。その後だと、彼〔人間〕をより容易に罪を犯すことへと引き込むことができるからである。すなわち、かの人、あるいは適切な

人を引き離すと。使徒によれば、「サタンは自ら、光の天使に姿を変える」（『コリントの信徒への手紙 二』11章14節）。次いで、彼を罪を犯すことへと引き込んだ後、彼を縛り付けて、罪から復活するのを許さないようにする。「彼の小さな身の証の筋は絡まっている」（『ヨブ記』11章12節）。それゆえ、以上のようにして、悪魔は2つのことをなす。欺くことと、欺かれた者を罪のうちに引き止めることと。

1098 c) また、世は2通りの仕方でも試みてくる。1つ目は、時間的なものに対する過剰で節度を欠いた欲望によって〔試みるということである〕。使徒によれば、「すべての悪の根は欲望である」（『テモテへの手紙 一』6章10節）。2つ目は、迫害者たちと暴君たちにより脅かすことによって〔試みるということである〕。「私たちもまた闇に包まれている」（『ヨブ記』37章19節）。「キリスト・イエスのうちに敬虔に生きようと欲するすべての人は、迫害を受けるだろう」（『テモテへの手紙 二』3章12節）。「体を殺す者たちを恐れてはならない」（『マタイによる福音』10章28節）。

1099 したがって、以上のようにして、試みとは何か、人間はどのように試みられるのか、そして、何によって試みられるのかが明らかになる。続いて、人間がどのようにして解放されるのかを見よう。

このことに関して分かっておかなければならないことは、キリストは私たちに懇願するよう教えたのは、私たちが試みられないことではなく、私たちが試みに引き込まれないことだということである。すなわち、人間が試みに勝つなら、冠で報いられる。そしてそれゆえ、「すべての喜びを認めよ、兄弟、あなたたちは試みのうちで多くのものに遭ってきたのだから」（『ヤコブの手紙』1章2節）。「子よ、神への従属に近づくあなたよ……試みに対しあなたの靈魂を準備せよ」（『シラ書』〔集会の書〕2章1節）。「試みを受ける人は至福である。証されたなら、命の冠を受けるからである」（『ヤコブの手紙』1章12節）。そしてそれゆえ、〔主は〕私たちが、共謀によって試みに引き込まれることのないよう願うことを教えられるのである。「試みについて、あなたたちは人間のものとしか理解すべきでない」（『コリントの信徒への手紙』10章13節）。すなわち、試みを受けるとは人間のことであり、共謀するのは悪魔のことである。

1100 しかし、神が悪へと引き込むことはないだろうか。「また私たちを試みに引き入れてくださいませぬように」と言っているのだから。

私は言おう。神が悪へと引き込むと言われるのは、許容することによって、すなわち、罪が多いので人間からその恵みを引き取り、それが引き取られたことで人間が罪にすべり落ちるという限りでのことである。そしてそれゆえ、私たちはこう歌う。「私の徳が欠けるからと言って、あなたは私を見捨てられませんように、（主よ）」（『詩編』70〔71〕編9章）。しかし、〔神は〕人間を、試みに引き入れられないよう、愛の熱意によって統治する。どんな愛も、小さなものでさえ愛がある限りは、どのような罪にも抵抗し得るからである。「大量の水も、愛を消すことはできないだろう」（『雅歌』8章7節）。また、知性の光によって〔神は統治する〕。これによって〔神は〕なすべきことについて私たちに指導する。というのは、哲学者〔アリストテレス〕が言うよ

うに、罪を犯す者は皆、無知なのであるから。「私はあなたに知性を与えよう、そしてあなたを指導しよう」(『詩編』31〔32〕編8節)。そして、このことを願って、ダヴィドはこう言った。「私の目を照らしたまえ。私が死のうちに眠り込むことがけっしてないように。私の敵が、『私は彼に力を振るってきた』と言う時がないように」(『詩編』12〔13〕編4-5節)。

1101 そして以上のことを私たちは、知性の賜物を通して得る。試みに同意しない時、私たちは清い心を保つからである。このことについては「心が清いなら至福である。彼らは神を見る」とある(『マタイによる福音』5章8節)。それゆえ、以上によって私たちは神を見るに至る。このことへと〔神は〕私たちを引き至らしめるのである。

願い7

さりながら、私たちを悪から解放したまえ。アーメン。

1102 以上私たちに主が教えてきたことは、罪の赦しを願うこと、そして私たちがどのようにして試みを避けることができるかということであった。しかしながら、ここでは〔主は、主が人間を〕悪から引き離しておくことを願うよう教えている。そして、この願いは、アウグスティヌスが言うように、すべての悪に、すなわち罪、弱さ、苦しみに全般的に対抗するものである。しかしながら、罪と試みとについては話したので、話さなければならぬのは他の悪、すなわち、この世の災難と苦痛すべてについてである。神はこれらから人間を、4通りの仕方で解放する。

1つ目の仕方とは、苦痛が決して襲ってこないようにするというものである。しかし、これはめったに起きない。聖人たちはこの世では苦しむからである。「キリスト・イエスのうちに敬虔に生きようと欲する者はみな、迫害を受ける」(『テモテへの手紙 二』3章12節)。しかし、神が時には誰かに譲り、悪によって苦しまないようにすることがある。すなわち、その人が無力であり、抵抗できないと知っている時で、これは、医者が弱く衰弱した人には、強い薬を与えないようなものである。「さあ、私はあなたに開いている扉を与えた。これは誰も閉じることができない。あなたは適正な徳を有しているからである」(『ヨハネの黙示録』3章8節)。また、天国ではこのことがあまねくあるだろう。何者もそこでは苦しまないからである。「6つの苦しみのうちから」、すなわち、現在の生の苦しみのうちには、それが6つの時期に区分されるのに応じてある苦しみから、「〔神は〕あなたを解放されるだろう。そして、7つ目の時期には悪があなたに触れることはないだろう」(『ヨブ記』5章19節)。「もう飢えることも乾くこともないだろう」(『ヨハネの黙示録』7章16節)。

1103 2つ目の仕方での解放とは、苦しみの中で〔神が〕慰める時のことである。すなわち、神が慰めるのでなければ、人間は持ちこたえられない。「私たちは、通常を超え、われわれの力を超えて重くなった」(『コリントの信徒への手紙 二』1章8節)。そして同じ箇所によれば「しかし、謙遜な者たちを慰める者、すなわち神が私たちを慰めてこられた」(『コリントの信徒への手紙 二』7章6節)。「私の心の私の苦痛の数だけ、あなたの慰めは、私の心を喜ばせる」(『詩

編』93〔94〕編〔19節〕).

1104 3つ目の仕方では〔の解放と〕は、苦しんでいる者たちに善をなし、そのことで彼らが悪を忘れるようにすることである。「嵐の後に、あなたは穏やかな好天を作られる」(『トビト記』3章22節)。したがって、この世の苦しみと苦難は恐れるべきではない。耐えるのも容易で、さらに慰めが混入しているからである。使徒によれば、「現在あるのは、瞬間的で軽い、私たちの苦難である。このようなやり方を超えて崇高な仕方では、栄光の永遠なる重みが私たちのうちでは働いている」(『コリントの信徒への手紙 二』4章17節)。というのは、これら〔現在の苦難〕にから、永遠の生命に到達するからである。

1105 4つ目の仕方では、試みと苦難とは共に善に向かう。そしてそれゆえ、苦難から「私たちを解放したまえ」と言わず、「悪から」と言う。苦難は聖人たちにとっては王冠に向かうものだからである。そしてそれゆえ、聖人たちは苦難に関し栄光を与えられるということになる。使徒によれば、「また、苦難のうちでのみというのではなく、苦難のうちでもまた、私たちは栄光を与えられる、苦難が忍耐を作り出すということを知っている者として」(『ローマの信徒への手紙』5章3節)。「苦難の時に、あなたは罪を取り去られる」(『トビト記』3章13節)。それゆえに、神は人間を悪と苦難から解放する。それら〔苦難〕を善へと向けることで。これは最大の知恵の印である。このような人は、悪を善へと秩序付ける術を知っている。そしてこれは、忍耐によって成る。これ〔忍耐〕は苦難の内でも有される。一方、他の徳は善を用いるが、忍耐は悪を用いる。それゆえに、〔忍耐は〕悪のうちにのみある。すなわち、反対、対立のうちでのみ、必要である。「男の教えは、忍耐によって知られる」(『箴言』19章11節)。

1106 そしてそれゆえ、聖霊は、知恵の賜物を通して私たちに願わせる。そして、このことを通して私たちは、平和がそれへと向かう至福に到達するのである。都合のいい時も都合の悪い時も、私たちは忍耐によって平和を有するからである。それゆえに平和を作る者たちは神の子と言われる。すなわち、神と同じ者たちと。というのは、神には、何ものも傷つけることができないように、彼らにもできないからである。すなわち、都合がいいものも、都合が悪いものも〔だからといって傷つけることはできない〕。そしてそれゆえ、「平和を作る者たちは至福である。神の子と呼ばれるから」(『マタイによる福音』5章9節)。

1107 「アーメン」とは、すべての願いを全般的に確立するものである。

「天の父よ」(「主の祈り」という祈り全体の要約的講解

1108 全体的に講解するためには次のことを分かっている必要がある。すなわち、主の祈りには、欲せられているすべて、そして避けられているすべてが含まれているということ。

そして、欲すべきすべてのものうちでなお欲せられているものは、なお愛されており、そしてこれこそ神である。そしてそれゆえ、「あなたの名が聖とされますように」と言う時、あなたはまず、神の栄光を願っているのだ。

また、神に対して欲し求めるべきものは3つである。これらはあなたに属している。すなわち、1つ目のものは、あなたが永遠の命に到達するようということ、そしてこのことをあなたは、「あなたの国が到来しますように」と言う時、願っているのである。2つ目のものは、あなたが神の意志と正義を実現しますように、ということであり、このことをあなたは、「あなたの意志が天と同じく地においても成りますように」と言う時、願うのである。3つ目のものは、生命に必要なものをあなたが有しますようにということであり、このことをあなたは、「私たちの毎日のパンを私たちに今日与えたまえ」と言う時、願うのである。そして、これら3つのことについて主は言っている。「まず、神の国を求めよ」。これが1つ目である。「そして彼の正義を」。これが2つ目である。「そしてあなたに投げ与えられたこれらすべてのものを」。これが3つ目である。

1109 また、避けるべきものとは、善に対立するものである。そして、第1に欲すべきものである善とは、既に言われたように4種類ある。

1つ目は、神の栄光であり、これにはどんな悪も対立しない。「あなたが罪を犯したとしても、あなたは何を彼に対して傷つけるでしょう……正しく行なったとしても、何を彼に与えるでしょう」(『ヨブ記』35章6節)。すなわち、[神が] 罰するという限りでの悪と、報いるという限りでの善とに、神の栄光が反映している。

2つ目の善は永遠の命であり、これには罪が対立している。罪によって滅ぶことになるからである。そしてそれゆえに、これを取り除くために私たちはこう言うのである。「私たちから、私たちの負い目を取り去りたまえ、私たちも私たちに負い目ある者を赦すように」。

3つ目の善は正義と善き業であり、これには試みが対立している。試みは、私たちが善を為すのを妨げるからである。そして、このことを取り除くために私たちはこう願う。「また私たちに試みに引き入れてくださいませんように」。

4つ目の善は善なる必需品であり、これには反対と苦難が対立している。そしてこれを取り除くために、私たちはこう願う。「さりながら、私たちが悪から解放したまえ」。「アーメン」。